

再びエロシェンコ君を送る

エロ君はまた北京を出た。彼の去留は、今の青年にとってもう何の意義もなく、報告などせずともよいのかもしれない。だが彼に関する一二の事はざっと言っておかなければならないので、またこの小文を書くことにする。

エロ君は詩人である。彼の思想がどんなに偏激でも、事実は何の運動にも参加していないし、少なくともわたしたちの家にはいたこの一年はそうであったと確信する。わたしたちはふだん彼が授業や読書作文するほかには、干しぶどう、梨膏飴と干しバナナを食べ、あるいは三貝子花園〔動物園〕へ虎が吠えるのを聞きに行くのを見るだけだ。管轄署の署長がわたしに、彼が北京に来てから、北京にいる外国人が少し怖がって、有名な騒動屋が来たと言っていると知らせてくれたけれども、中国の官庁が大して気にしていないのは、わたしが賛成しかつ敬服するところである。しかし大杉栄失踪のニュースが伝わって以後は、エロ君は思いもかけずいぶん面倒に見舞われ、多くの関係のない日本人が、電報やら、手紙やら、面会やらで、皆彼に大杉の行方を尋ねて来た。しかし彼は北京の総監でもないから、当然そんな事は知るはずもない。しかるにそういう関係のない連中は、彼は大杉と一緒にだめ込んでいる。これはとても明らかなことである。一カ月過ぎて、北京の官庁は日本側からの、ロシアの盲人が大杉と北京で過激運動をしているとの通告に基づき、捜査に着手した。そこでわたしたちの胡同の入り口に大杉の写真を持ったものが張り番をしているということだし、わたしたちの家にも調査の人間がやって来た。その警官はわたしの話を信じ、彼は決して何の運動もしていないし、しかも大杉とやらも見たこともないという、わたしの保証書を手にして、帰って一件落着とした。わたしには、東京のスパイが何年も大杉にくっついていながら、なぜ彼がどんな主義者かも知らないのは解せないし、しかも彼が北京にやって来て過激運動をするなどと信じるのは、全くのお笑いぐさでしかない。いまさいわいエロ君はすでに北京を去ったし、胡同の入り口でも大杉を捕まえられなかったのだから、中外の官吏商人もみんな安心でき、わたしの戸主としての責任も両面で綺麗さっぱり果たしたということになる。

エロ君の今回の出発は、もともと彼の予定の計画であり、去年の冬の初め中国に帰って来て途中で奉天に立ち寄った時、日本の記者に言ったものだが、もとは夏休みに去るつもりであったのが、今は二カ月繰り上げただけのことである。彼が公表した帰国繰り上げの理由は、林の中に故郷のナイチンゲールを聴きに行きたいというもので、彼の故郷ハルコフのナイチンゲールはヨーロッパでも有名だそうで、それがあるいは本当にはるばる聞きに行く値打ちがあるものなのかもしれない。しかしわたしの推測では、もうひとつ小さな理由がある、つまり世界語学者の寂寥である。世界語運動に熱心な先輩の失望と不快を引き起こすことを恐れずに、わたしは北京の——少なくとも北京の——世界語運動は実際活発でないことを指摘せざるを得ない。運動者がどれだけ熱心であろうと、反応がなければ、やはり極めてつまらないだろう。エロ君はとても賑やかなのが好きな人である。たとえば教室に行つてごくわずかな人がそこに坐っているのを聞くだけでも、たぶん彼が上機嫌になる事ではないだろう。世界語でのロシア演劇の講演、——『飢餓王』

は一度講義しただけである、——なぜ中止したのだろう、彼は言わないが、それは教室があまりに大き過ぎたせいに決まっているとわたしは思う。しかしもともとこんなことは中国では何の不思議もなく、他の学者の講演もたぶん大抵こうなってしまう。エロ君も言ったことがある。青年が社会の背骨となって事をやらないのならば、みんな麻酔剤を吸いに行けばよい、と。だからみんながもし本当に阿片を吸い金丹を飲んで他の事をやらないのなら、エロ君も当然不思議とは思わないだろう。だが彼自身もあまりに寂寞でつまらないと思うだろう。北京で砂漠の風音を聞くよりも、もちろん林の中にナイチンゲールを聞きにゆくにこしたことはない。したがって彼の出京については、わたしたちはたとい安心できるとは限らなくとも、無理やり引き止めることはできないと思うのである。

冬休み中にエロ君が上海にいたとき、何新聞だったかが彼は劇評事件のために学生に追い出されたのだと言ったことがある。今回もおそらく彼は大杉事件のために追放されたのだと言うものが出るだろう。こうしたデマに対抗するために、特にこの一篇を書いた。 一九二三年四月十七日。

※初出：1923年4月21日『農報副刊』